旭川文学資料友の会　第32号
友の会通信

発行・ＮＰＯ法人　旭川文学資料友の会
〒０７０―００４４
旭川市常磐公園　旭川市常磐館内
電　話　０１６６―２２―３３３４
https://www.abs-tomonokai.jp/
印刷・株式会社あいわプリント

大丈夫ですか？「日本語」

旭川文学資料館館長
三原一仁

どうも日本語がおかしい。脱税を申告漏れと言ったりするのはずいぶん前からありました、公徳心に欠けた輩の恥知らずな言い訳ですが。それが「未曾有」がミゾウユウだったり「云々」がデンデンだったりするようになってからはいよいよおかしくなっています。昨今は、説明責任を果たす果たさないがどうしたというのでしょうか、説明すればそれでいいという問題ではないでしょう。

日本語をしっかり身につけることより、小学生から英語を学ばせて、日本語の意味を理解不能な日本人に育てようとしているとしか思えません。日本語が泣いています。

百年以上前のことです。「現代日本の開化」という講演のなかで、黒船来航以来、日本は国家も国民も自信や自尊心を失っている、このまま西洋を受け入れ続けていいのかと警鐘を鳴らした人がいました。夏目漱石です。

漱石が活躍した時代には、すでに当時の学生の語学力の低下が問題になっていたようです。彼は「語学養生法」（一九一一年）という一文の中で、英語の力が衰えた原因の一つは日本の教育が正当な順序で発達した結果だと言っています。自分が学生だったころはすべて英語での授業だったし、そういう明治初期の高等教育は一種の屈辱だったとさえ言っています。

一八八二年に東京専門学校（現在の早稲田大学）の開校式の演説で、大隈重信の盟友小野梓が学問の独立こそが国家独立の礎であるとしてこういう趣旨のことを語っています。外国語でなければ専門的な学問ができないというが、外国語の習得ごときに時間と労力を費やして消耗すれば、結局専門的な学問や技術を究めるのを阻害することになる、だから学問は翻訳を使って自国語で行うのがよいと。

英語学習の意義を十分承知していた福沢諭吉は、明治七年六月七日の演説で英語公用語化論者の森有礼（後の文部大臣）を批判してこう述べています。言語はその国の文化が発展するに従って語彙も自然に増えて言葉はますます豊かになっていく。言葉は文化と一体なものだと。

国際語とか世界共通語という名のもとに、英語が跋扈していますが、経済的視点からいえば、英語を学ぶ苦行のない英米人に比べて、それ以外の世界の大多数の人々にとっては、英語を学ぶ時間的金銭的精神的負担はいかほどなものでしょうか。つまり英米人以外の子どもたちは、とてつもない不利な出発点に立たされて、すべてが地球規模で展開する現代社会を生きていかなければならないという、これは謀略に違いありません。

世界共通語は未来永劫英語なのですか。世界の覇権は移り変わって来ました。世界における米国の地位が低下の一途を辿っているのは自明でしょう。米国との関係がすべてであるかのような日本ですが、英蘭両国が世界の海上覇権を争っていた時代に、関係を蘭国だけに限定してまもなく、その蘭国は没落し世界の覇権は英国に移った江戸時代の歴史にどう学ぶべきなのでしょうか。

英国留学の経験もある明治の論客馬場辰猪（土佐出身）の「日本語文典」の序文も紹介しておきましょう。「一、英語学習には膨大な時間がかかり若者の時間を浪費する。二、英語を公用語化すれば国家の重要事項を議論できるのが一部の人間に限られてしまう。三、英語の公用語化は社会を分断し格差を固定化する。四、英語を公用語化すれば国民の一体感を失う」まさしく今日的な論点でしょう。

日本語は、漢字・ひらがな・片仮名そして近代以降は羅馬字も加えて四種類の文字を自由に使いこなす世界では類例のない言語です。宇宙人がいて文字を持っていれば、それさえも取り込んでしまう日がやがて来ないとはいえません。と、ここまでこの文章には片仮名外来語は使っていませんが何か。

第二十六回旭川文学資料展

「山岳文学の系譜―相川正義所蔵資料を中心として」を終えて

旭川文学資料友の会理事　黒田　忠

昨年七月十一日から十二月二十九日まで、旭川文学資料館第二十六回企画展「山岳文学の系譜展」を開催しました。当初会期は十一月四日までとのことでしたが、好評につき会期を延長しての開催となりました。今回取り上げ展示したのは、大雪山の父と言われている小泉秀雄、その小泉秀雄の業績を丹念に調べ上げ、何冊もの著書を著した山岳史家で、昨年三月六日に逝去された清水敏一氏、層雲峡の名付親の大町桂月、大雪山登山の先駆者大島亮吉、日本の山々に関する数多くの著書があり、登山を志す人たちにとっては憧れの登山家です。初期の大雪山登山の先駆者でもあり、大雪山に関する著書には『石狩岳から石狩川に沿うて』や『北海道の夏の山』などがあり、大雪山登山を全国に広めた功労者とも言えます。その大島亮吉と親交のあった北大山岳部初代部長の伊藤秀五郎。伊藤秀五郎の名著『北の山』の巻頭には、若くして穂高で逝った大島亮吉に対する哀悼の言葉が載っています。その著書には、坂本直行の装丁や挿絵がたくさん使われています。相川正義氏も詩人であり、北大スキー部の部歌を作詞しました。加納一郎は極地探検研究家として知られており、スキーによる積雪期の十勝岳や旭岳の初登頂を成し遂げています。今まで北海道の登山史を語るとき、相川正義氏のことは語られてきませんでしたが、伊藤秀五郎や加納一郎などとの交流の跡を見てみると、相川正義氏の多才な才能が開花し、芸術や文学の世界で周囲の人に多大な影響を与えていたことが認められます。平成十一年八月八日から九月十五日まで旭川市博物館で「小泉秀雄展」が開催されました。この企画展を記念した講演会では清水敏一氏が講演をされています。二十五年前のことです。清水敏一氏の業績を紹介するコーナーにおいては、清水敏一氏の奥様　久仁恵さんのことも紹介させていただきましたが、本企画展が延長に入ってから、亡くなった清水敏一氏のパソコンの中から見つかった未発表と思われる文章「山妻物語」を関係者の方の了解を得て、会場に掲示させていただきました。見逃した方向けに抜粋して紹介したいと思います。

「小著『わが山の人生』（二〇二〇年、大雪山房）のなかで、「わが妻のこと」を書いたことがある。このたびの「山妻物語」はその続編のつもりで書いた。山妻は自分の妻の謙称だそうだが、それよりも山と妻の組み合わせの意味を込めた。すなわち妻も山と切り離しては考えられないからである。

―（中略）―

明るい顔

河井酔茗（かわいすいめい）

なんという明るい顔／その顔があらわれると／まわりが明るくなる／クリーム色のばら一りん／新しくさしかえたよりも／へやの中が明るくなる／／その顔には／ひろびろとした野原のようなかがやきと／まともに向かう力と／いつもさいたばかりの花のような／香気とがある／／くもりのない／かげりのない／たくみのない／いつわりのない／ありのままの心が／ありのままにあらわれて／夢もまぼろしも見えない顔／／だれにでもよびかける顔／すべてにうなずいている顔／その顔があらわれると／人たちがいきいきと清くなり／どんな世の中にも／たのみになる人がいるようで／心が明るい方に反射し／だれの顔も明るくなる

筆者がこの詩を寄せたのにはわけがある。それはこの顔に彼女を置き換えて見たのである。たしかにKが加わると周りが明るくなる。そのほかにも全編にわたっておおむね当てはまる。彼女にはそのムードを醸しだす気配があった。

それとは別に作詩者・河井酔茗（一八七四～一九六五）は、小島烏水（一八七三～一九四八）と同じ、文庫派文人であった。彼は山岳詩人であり山の詩も詠んでいる。このように考えると、詩「明るい顔」と、詩人・河井酔茗、Kと筆者が脈絡を持って繋がっているように思えてくるのである。実はこの詩はもう七十年も昔の若かりし頃、河井酔茗の名を借りて彼女に贈ったのであった。すなわち彼女への賛辞である。

彼女の素の性格は、繊細であり神経も細い。ひっそりと目立たず生きたい。」

紙面の都合で大幅に中抜けで掲載しましたが、奥様に対する愛情があふれています。

ちなみに清水敏一氏の著書『懐想の記』発行日は九月二十六日、奥様の誕生日です。最後の著書『わが山の人生』の発行日は七月十九日、奥様の命日です。会期中、さまざまな発見と出会いがありました。感想ノートにも温かい言葉が並んでいてとても勇気を頂きました。ありがとうございました。

開催したミニ企画展

沓澤章俊

「旭川文芸の素描（デッサン）」

―旭川在住の漫画家日野あかねが イラストで描く旭川文芸の一断面―

（二〇二三年八月八日～九月三十日）

付録が楽しみだった「冒険王」、その発売日前夜は待ち遠しく興奮して眠れなかった週刊「少年ジャンプ」や「少年マガジン」。ご多分に漏れず、小学生時代は漫画好きな少年だったので漫画雑誌は身近な存在だった。中学生になっても、お気に入りのコミックスを何度も読んだ。流行ものも多々読んだが、戦前から活動をはじめた漫画家の作品も好きだった。『のらくろ』や『サザエさん』は勿論、秋好馨の『轟先生』、比較的安価で買えた講談社漫画文庫では横山隆一『フクちゃん』、杉浦茂『猿飛佐助』、前谷惟光『ロボット三頭兵』等々。

少ない小遣いで買えるのは文庫。今はもうない冨貴堂本店に週一度は通っていた。その文庫つながりで、ちょっと背伸びして手に触れたのが岩波文庫や新潮文庫。特に、赤、青、黄、緑、白の帯を締め、背に☆★の印を着けた岩波文庫は魅力的で、内容を十分に理解できないながらも買って読み始めた。

漫画から文学の方へ。少しの気負いがあるにせよ、それは自然な移行だった。

日野あかねさんの漫画をはじめて拝見したとき、今は無いような昔からの、あるいは、今も在るけれど忘れていた文学的情緒が心身に湧いてきた。作風がすんなりと入ってきて、それでいて何かをうったえてくる。

詩誌「円筒帽」の詩人たち、小熊秀雄、今野大力、鈴木政輝、小池栄寿。旭川歌話会で小熊と一緒だった齋藤史。旭川で十数年過ごした知里幸恵。逝去の二か月前、旭川に来ていた芥川龍之介。皆、初々しく甦った。

老若男女を問わず、新鮮な気持ちで観覧できて、とてもよかったとの声を多くいただきました。日野さんにこの場をかりてあらためて感謝いたします。

日野あかね作
詩誌「円筒帽」の詩人たち

日野あかね作
齋藤史の短歌より

「劇団『ＢＲＥＡＴＨ（ブレス）』の軌跡

―繋がりゆく魂～旭川の文化―

（二〇二三年十月五日～三十一日）

旭川の市民ミュージカル劇団「ＢＲＥＡＴＨ（ブレス）」の第八回本公演が、昨年十一月四日、五日に旭川市民文化会館で、同月十一日には東京都品川区立総合区民会館きゅりあん大ホールで行われました。多くの観客の方々がブレスの躍動感ある楽しい舞台を満喫しました。

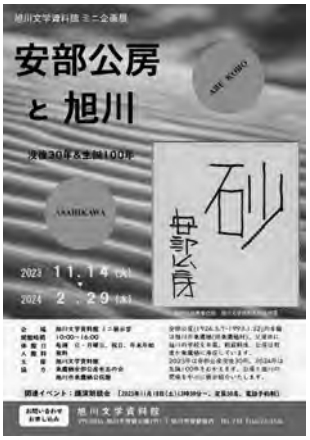
当館では、代表の森ただひろさんの協力を得て、ブレスの第一回からの公演ポスター、書き込み台本、パンフレット等や、当館所蔵資料から今回の公演で登場した宮沢賢治、知里幸恵、三浦綾子の著書、関連本、翻訳本等を展示しました。

多様な来歴をもつ一人たりとも排除しない社会をめざし活動しているブレス。その理念はますます今後大切になってくると思います。

ミニ企画展

「安部公房と旭川 ―没後30年＆生誕100年」

（二〇二三年十一月十四日～二〇二四年二月二十九日）



戦後日本文学を代表する作家安部公房（一九二四年三月七日～一九九三年一月二二日）。代表作「砂の女」は世界二十数か国で翻訳され、映画化もされました。今でも国内外で多くの読者に刺激を与えています。

その安部公房の本籍は旭川市東鷹栖（旧東鷹栖村）にあり、公房の父母共に旭川の学校を卒業しています。

今回のミニ企画展では、旭川と公房の関わりを東鷹栖安部公房有志の会、旭川市東鷹栖公民館の協力を得て展示紹介しました。

興味深い展示物は、一九七七（昭和五二）年六月七日に、今は無い旭川ヤマハホールで舞台上演された「イメージの展覧会」の写真や台本等の資料。〈音＋映像＋言葉＋肉体＝イメージの詩〉を創造するこの舞台は安部公房作・作曲・演出で安部スタジオの上演でした。

当館所蔵資料からは、東大在学中に自費出版したガリ版刷りの『無名詩集』、チラシにも画像を使用した公房の〝砂〟の直筆色紙。また、公房の詩作品「悲歌」と実弟　井村春光（いむらはるみつ）の詩作品「秋」が掲載されている詩誌「野性」（一九五〇年一月）、「砂の女」の原型ともいえる短編小説「チチンデラ　ヤパナ」掲載の文芸誌『文學界』（一九六〇年九月）ほか、作品の初出掲載誌。公房の従姉妹　渡辺三子（さんこ）さんが編集発行していた「郷土誌あさひかわ」等々。

関連イベントとして二〇二三年十一月十八日（土）十三時三〇から『講演朗読会』を行いました。詩人で東鷹栖安部公房有志の会事務局長の柴田（しばた）　望（のぞむ）さんに「安部公房と旭川」という演題でご講演いただき、朗読家の酒谷（さかたに）茂靖（しげやす）さんに公房作品「睡眠誘導術」「笑う月」を朗読していただきました。

参加された方々の中から、詩誌「フラジャイル」同人の山内（やまうち）真名（まな）さんの感想をここに掲載いたします。

三度講演を聴いて

山内　真名

最初に安部公房についての講演を聴いたのは二〇一八年一月に東鷹栖公民館で行われた「水中都市」だった。公房所有のシンセサイザーサウンドと映像スライドによって作品世界を再現し、管理社会の新体系の確立（高野斗志美）への警告を含んだ公房のメタファー世界を読み解いていく企画はとても新鮮だった。公房は絶筆「飛ぶ男」でも主人公が入眠する際の音楽としてバッハのシンセサイザー曲を使っていて、当時身近に親しんでいたことがわかる。

二度目は昨年十月にやはり同館で行われた鎌田東二さんの講演「安部公房　―　仮（化）の文学」。公房の出身地、日本政府が創設した満州国の奉天は幼子の眼に最先端の都市と映った。疎開した日本との格差を実体験したことが彼の精神構造の基盤となり、記憶の初期化、夢と現実の交錯、故郷喪失、ボーダーレスという未踏の超現実的回路を小説世界に開いた。彼の精神的ルーツを検証し、亡命という共通項によってハンナ・アーレントとも比較、人類の生存可能性を問うた彼の作品の現在への予言性（「第四間氷期」）にまで言及した希有な講演だった。

そして今回再び、東鷹栖安部公房有志の会事務局長の柴田望さんが多忙な仕事の合間を縫って講師を務め、公房の原籍地東鷹栖で起ち上げた会の活動を絡めつつ公房作品の特色について語った。「人間は時間的存在である」と云ったハイデッガーからの影響、戦争で親友を亡くした哀しみの詩、敗戦によるイデオロギーの混乱が変形譚に繋がり、公房作品には幾何学の補助線が伏在している、ということが理解された。酒谷茂靖さんによる「睡眠誘導術」「笑う月」の朗読も目を閉じて目を休めながら作品世界に浸ることができた。最後の文学資料館館長三原一仁さんの挨拶、ハンス・ヨナスの、自足する植物の合理性と疎外された存在である人間を特徴づける文化との差異の指摘を面白く聴いた講演だった。

開催したミニ企画展

「小学校の校歌展 Ⅱ この校歌はあの人が…」

（二〇二四年二月一日～六月二十九日）

沓澤章俊

昨年に続く第二弾として開催中の「小学校の校歌展　Ⅱ」は、市内小学校計22校の校歌と、いずれも現　北海道教育大学旭川校（旧　北海道旭川師範学校・北海道第三師範学校・北海道学芸大学旭川分校）に関係する次の作詞者四名の資料等を展示紹介しています。

入江好之　一九〇七（明治40）年小樽生まれ。詩人。旭川師範学校に入学し雑誌部で活躍。一九二七（昭和２年）詩誌「狼」を同じ師範学校生の草間幸吉、近江勲夫らと創刊し〝狼グループ〟と呼ばれた。翌年二回生として師範学校を卒業、旭川日章小学校の訓導となる。一九三六（昭和11）年に詩集『葦牙』（序文　鈴木政輝）を発行。次の詩集を発行準備中に北海道綴方連盟事件に連座、起訴猶予となるも、一九四一（昭和16）年国民学校を退職。一九四三（昭和18）年から約二年間、旧満州国奉天市（現　瀋陽市）の工場に勤務。一九四五（昭和20）年七月、吉林師団に応召。敗戦後の同年九月、奉天市北稜に収容され、同年十一月には、旧ソ連内ウラン・ウデ地区に収容される。一九四九（昭和24）年十月、第一大拓丸で舞鶴港に帰国、家族の居る旭川市旭町三丁目に帰る。翌年四月より北海道教育評論社編集部長。詩誌「詩人種」「亜細亜詩人」「野性」「情緒」等に参加。一九五四（昭和29）年楡書房設立。同年北海道詩人協会を設立すべく奔走、九月にアンソロジー『北海道詩集』第一集を刊行、詩人協会初代事務局長となり以後二十年間務める。一九六二（昭和37）年二月、北書房設立。詩集は他に『凍る季節』『花と鳥と少年と』『ひとつの歴史』がある。

「詩人種」
２巻３号

「亜細亜詩人」
第２集

坂本富貴雄　一九一〇（明治43）年、山梨県生まれ。詩人。筆名　坂本蕗夫。小学生の時に土別へ、のち旭川に移住。一九二五（大正14）年四月、永山農業学校（現　北海道旭川農業高等学校）林科に入学。詩歌誌「ちゃるめら」の創刊メンバーとなり、詩誌「土塊」にも参加。一九二八（昭和３）年三月、三回生として卒業、四月、東洋大学に入学。在学中に活発な文学活動を行い、福田正夫主宰の詩誌「焔」に参加。詩誌「仙人掌」を編集発行人として創刊。一九二九（昭和４）年十月、詩集『根がある』を仙人掌社から刊行するも発禁処分を受ける。旭川の文芸同人誌「裸」、詩誌「登場」「トロイカ」に参加。一九三二（昭和七）年三月、東洋大学文学科を卒業。旭川新聞社編集局に勤務。その後、教員生活に入り、帯広高女教諭、一九四〇（昭和15）四月、旭川師範学校教諭、のち北海道学芸大学旭川分校教授、付属中学校長となり退職まで三十三年間、現　北海道教育大学旭川校に籍をおいた。その間学内文芸サークル誌「北門文学」を創刊し後進の育成に努めた。退官後名誉教授となり、札幌静修短期大学（現　札幌国際大学）、道都大学（現　星槎道都大学）各教授を務めた。所属誌は他に「国詩評林」「情緒」「北海道文学」等。

「仙人掌」
３巻２号

「トロイカ」
甦生号

清水重道　一九〇九（明治42）年、東京生まれ。国文学者、詩人、作家、歌人。一九三三（昭和８）年、東京大学文学部国文科卒業。東京音楽学校（現　東京藝術大学音楽学部）、北海道第三師範学校、群馬大学の各教授を歴任。東京音楽学校時代に「沙羅」を作詞、作曲家の信時潔が曲をつけ歌曲集『沙羅』を発

表。のちにコロンビアレコードへの録音も行われ、それが一九四三（昭和18）年度の文部大臣賞を受賞。戦前から主に国文学に関する執筆活動を行い、著書に『まくらのさうし』『日本文学の歴史　上世篇』『アイヌの神話と伝説』等多数。

川口蕗香　清水重道と同年の北海道生まれ。作詞家、作曲家。本名は宍戸馨で筆名が川口蕗香、藤宮三郎、小田三平。一九三〇（昭和５）年、旭川師範学校卒業後、教育出版に勤務、常務取締役となる。池内友次郎を師とし、小中学校の音楽教科書掲載の歌や、校歌を数多く作詞作曲。本名と筆名を使い分け、一人で一校の校歌を作詞作曲している場合もある。

◎校歌を紹介している小学校

嵐山、雨紛、大町、神楽岡、神居、神居東、啓明、向陵、知新、春光、新町、末広、近文、千代田、富沢、豊岡、永山、永山西、西御料地、東町、北光、緑が丘。（五十音順　計22校）

◎会期中の四月二十七日（土）十三時三〇分から記念講演会を実施します。小樽商科大学商学部准教授で『校歌の誕生』の著者でもある**須田珠生さん**にご講演いただきます。

定員五十名、予約制（３／21から電話予約受付、0166－22－3334まで）。

須田さんには川口蕗香の経歴等を教えていただきました。ありがとうございました。

エッセイ

常磐公園に寄せて

日野　あかね

文学資料館、小熊秀雄詩碑、今野大力詩碑を回り常磐公園のベンチで木々を見、鳥の声に癒される。ここ数年の私のルーティン。

実は今から三十年以上前。わたしは今の旭川ケーブルテレビポテトさんのあたりに住んでいて職場の帰りはいつも公園で休憩していました。その当時、すでに漫画家としても作品発表しており筆記具を持ちベンチに腰掛けて創作ものんびりとしていました。

当時は大きな売店がありそこを中心に親子連れ、カップル、子供たちでとても賑わっていてその姿を遠くから見るのも楽しみでした。

そんな風景から生まれたわたしの漫画、タイトルは「片思いパークランド」。

主要人物が七人。そのすべての人間がそれぞれ公園で逢う人に片思いをしている、というオムニバス形式の漫画。昔から群像劇が好きなのですが「公園」はその舞台に打ってつけなのでした。

ラストは、お互いの恋路を応援していた同志が実は一番気が合う大切な存在だと知って結ばれる。「憧れの人に理想を押し付けて恋に恋する」という段階から成長する、という、まあ、メーテルリンク「青い鳥」のオマージュですね。そんな話を描きました。

それにしても常磐公園。開拓の歴史と共にとても古い雅な公園。最近知ったのは、そうやって創作をしていたのはわたしだけではなかったという事実。

小熊秀雄さんは旭川で活躍していたから常磐公園の詩をつくったのはわかるのですが、芥川龍之介さんも、常磐公園のしだれ柳で句を詠んだかもしれないとは！

今は雪で閉ざされていますがその分、バードウォッチングには最適。流行りのシマエナガもすぐ見つけられる。大切にしたいですね。美しい公園を。

では締めに、その芥川龍之介さんの句を。

雪どけの中にしだるる柳かな

会員さんのページ

隣の国

松井　芳

二〇一一年の記憶…。

ペルーへ行こう、マチュピチュへ行こう、と思い立って三年目。ようやく実現した。

遙かに遠くへ来た。そう思った。首都リマの海岸公園で、現地に住んで二十年だという日本人のガイドさんが、軽い調子で言った。「日本は太平洋を挟んだ隣の国です。日本で起きた地震で派生した津波は、はるばる、ペルーの海岸に達しました」と。

私は思わず頷きたい気分になった。繋がっているというには遠すぎると感じる大地に、やすやすと繋がっていく自然の為せる業を、思い知るからだ。

そして、国民の半数近くを占めるインディヘナといわれる先住民は、アジアからベーリング海峡を経てアメリカ大陸を南下し、一万二千年程前にこの地に辿り着いたという。

私は初めて人類を考えた。人種ではなく、人類を。遠い遠い昔の私の血を考えた。今まで訪ねたどの国とも違う不思議な感覚だった。

それから、ガイドさんは一ヶ月余り仕事が無かったそうだ。三・一一の日本の出来事は、海を隔てた隣人の仕事を奪っていた。

あの時、旅行の予定にワクワクしていた私が、友達にメールしようとした。その時、カタカタと何かがぶつかる音がして、ゆっくりと揺れはじめた。目まいかと思った。が、部屋が揺れている。地震だと気が付く。

余震は二回だった、我が身に起きたのはそれだけ。

テレビ画面に現れる不思議な光景　―　まるでアメーバが増殖するように、未知なるいきものが田んぼを這い、畑を舐め、日常を呑み込み、やがてそれは悲鳴に変わった。

少し前まで和んでいた心が硬直する。友の安否を問いたくても、電話は通じない。メールも「送信できません」と表示が出るばかり。とはいっても、あわてているわけではない。無事を信じていながら、人並みのことをしているおかしさ…。

地震・津波・原発事故と国の一大事を他人事（ひとごと）のように見守るしかなかった。

それでも、マチュピチュを目指したのは、あの震災から二ヶ月後。

首都リマからナスカへ、地上絵を遊覧飛行で見る。それから向ったマチュピチュは、この年発見されて百年。記念バッチにちょっと得した気分になった。

天空の世界遺産から、インカ道を太陽の門まで息を切らせて歩いた。やっと辿り着くと、先着した仲間たちが「これで皆揃ったから戻ろうか」とは、なんと無情な…。

インカ帝国の都だったクスコが、もっと高地なのが心配になる。

だが、私は案外平気だった。体調を崩し、往診を受けるツアー仲間が多かったなか、普通に食事をして寝て。そして翌日、往診を受けた人が言う、「往診に来たドクター、ハンサムだったね」と。まあ、残念。私はハンサムさんに会えなかった～。

時間が経ちすぎて、景色の思い出が薄れてしまった。ただ「隣の国」の一言が強く心に響いた旅だった。

2011年５月19日
マチュピチュにて

資料館だより

受贈資料（敬称略）

（二〇二三・八～二〇二四・一）

・**加川　憲一**　俳誌「海程」一～五四四号
・**谷口　亮**　野間宏、小田切秀雄、三木卓の葉書（谷口広志、谷口涼子宛）
・**マーク・ウィンチェスター**　マーク・ウィンチェスター『いま、戸塚美波子「一九七三年ある日ある時に」を読む』（著者サイン入り）他
・**池田　正雄**　池田正雄『取り残されても』
・**明石　幸子**　秩父事件関連図書約六十冊
・**北海道詩人協会**『北海道詩集』七十号
・**北海道教育大学旭川校**　『北海道教育大学旭川校百周年記念誌』
・**岸　美千代**　「高栄文学」二十四、二十六号（菅原政雄編集発行）、他、道内関係本。
・**小熊秀雄賞市民実行委員会**　小熊秀雄賞贈呈レリーフ、塩田慥州直筆の書二点（小熊秀雄詩碑に彫られた小熊の詩「無題」、詩碑裏面の小熊年譜）他
・**中家菜津子**　中家菜津子詩集『ミトコンドリア　イヴ』
・**菱谷良一自伝刊行委員会**　菱谷良一『百年の探究―眞の自由と平和を思考し続けて―』
・**三原　一仁**　旭川の小学校記念誌他
・**東　延江**　東延江詩集『ダミアンの涙』、全国、北海道内の詩誌他多数
・**冨岡　悦子**　詩誌「午前」二十四号
・**野呂　春樹**　木野工作品掲載誌コピー
・**日野あかね**　池袋モンパルナスの会会報他
・**柴田　望**　柴田望詩集『帯』、詩誌「フラジャイル」十九号、アンソロジー『詩の檻はないNO JAIL CAN CONFINE YOUR POEM』
・**恒成　崇**　大町桂月の子孫の方からの書簡他
・**大堀普美子**　大堀普美子『白い道、どこまで続く　私の小熊つね子抄』
・**高岡　修**　高岡修詩集『微笑販売機』、高岡修句集『蟻地獄』
・**森内　伝**　『嵐山小学校80年・嵐山中学校30年記念誌』
・**坂本　剛志**　旭川の漫画家　藤田和日郎、布浦翼、寺沢武一、前川たけし、中山昌亮ほかの漫画本多数。
・**岡和田　晃**　岡和田晃編『上林俊樹詩文集　聖なる不在・昏い夢と少女』（編者サイン入り）他

その他、各地文学館、記念館館報、各地文芸誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんの御寄贈を賜りました。心よりお礼申し上げます。

友の会人事動向（敬称略）

【新入会員】
佐藤めぐみ

【現在会員数】（二月末現在）
一七四名（うち法人九件）

※旭川文学資料館の受付ボランティアを募集しています。興味のある方は事務局（0166-22-3334）までお電話ください。

編集後記

北海道新聞一二月二三日「今日の話題」に、「北海道ゆかりの漫画家は約三五〇人に上る」とあり、さらに同紙上川・旭川版にその中の一人日野あかねさんが旭川地方法務局の「自筆証書遺言保管制度」を漫画で説明したパネル展が開催されたことが掲載されました。

日野さんには昨年、ミニ企画展にご協力いただき、今号通信にも御寄稿くださいました。

旭川ゆかりの漫画家さんたちのご紹介がまたできたらと思っています。

令和六年、旭川は穏やかに明けましたが、能登半島地震の大災害、羽田での思いもかけない大事故と続き、不穏な幕開けとなってしまいました。が、この後は被災地での復興が一日も早く進み、明るい話題が押し寄せるような一年になりますようにと願ってやみません。（ま）